

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

お茶の産地で知られる奈良市田原地区には、「祭文語り」という全国的に貴重な語り物芸が伝わっている。4月17日午後、この祭文語りが、奈良市中新屋町の奈良町にぎわいの家で特別公開された。出演は田原伝統芸能保存会の方々5人で、まず始めに保存会会长の松本多司さんが赤穂義士銘々伝から、八百屋になつて仇討ちの本懐を遂げる「勝田新左衛門夫婦別れ」を、顧問の岡井稻郎さんが、地元田原の孝行娘の生涯を語る新作「孝女もよ」を語り、30人ほどが語りの世界を楽しんだ。

田原に祭文語りが伝わったのは、伊賀上野を本拠とする北山平右衛門一行の北山一座からだった。田原地区をはじめ、大和高原一帯から盆地部、さらに大和以外も近畿で広く活躍し、農閑期に娛樂に乏しい農村など

で別世界の物語を語つて喜ばれていた。祭文とは、本来神を祀る時に読む祝詞のことだが、後に山伏が節を付けて歌う山伏祭文になり、これが語り物化、歌謡化したものとされる。語り物化した祭文は、説経節と結びついて「説教」、「祭文」となり、さらに法螺貝を用いた「テロレン祭文」になる。この系統から「ちよぼくれ」「うかれ節」が生まれ、さらに「浪速節」「浪曲」になつたとされる。歌謡化した祭文が「歌祭文」で、それが「口説き」となつて「祭文音頭」と呼ばれた。祭文語りは、見台を前にして座り、右手に山伏の手錠杖から環（金輪）を取り去った長さ30センチほ

A black and white photograph showing three Japanese men in traditional dark robes and white collars, seated on the floor and writing calligraphy on long, narrow scrolls. They are using brush pens and ink. The man on the left is looking down at his scroll, the middle one is looking towards the right, and the man on the right is looking slightly to the left. They are positioned in front of a low wooden platform holding their scrolls. In the background, there are sliding door panels with lattice windows.

奈良町にぎわいの家の祭文語りの公開。（右から）岡井稻郎、松本多司、峯村喜明の3氏=筆者撮影

は、冒頭や語りの合間に
行われる。冒頭では、「一
の貝、二の貝、三の貝」と
3種類行われるが、これ
は口慣らしだといい、そ
の後「ダシ」の語りを経
て、演題を紹介する「外
題付け」を行い、そのあ
とから実際の語りが始ま
る。

北山一座の中には、明治春や八重女などの女性もいて人気を博し、青年たちは村はずれまで送り迎えしたというが、その後聞くだけでは飽き足らない人々は、弟子入りまでして活動し、ついに地元でも一座を結成するようになつた。

法螺貝と錫杖で語り物

(奈良民俗文化研究所代
表)